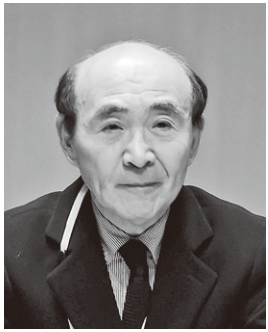
「見える」を問いなおす ――レンブラントの三つの体験

若森　栄樹（獨協大学）



「見える」を問いなおすことは、様々な動画を簡単に加工でき、インターネットで流せるようになっている現代では、とても重要である。私たちは「見えるもの」にだまされやすくなっている。したがってもう一度「見える」ことを問いなおす必要があるのではないだろうか。私はこの発表で、十七世紀オランダの画家レンブラントが二十二歳のときに描いた「エマオの巡礼者」という絵を取り上げた。この絵には十字架上で死んだあと、エルサレムからエマオという町に向かう途中の二人の弟子に対して、復活したキリストが姿を現したというエピソードが描かれている。この場面を描くにあたってレンブラントは、他の画家たちとは異なり、イエスはシルエットとしてのみ描き、信じられないものを前にしたときの二人の弟子の表情と姿勢の方に重点を置いた。一人は恐怖心と不信の念を表情に現し、もう一人は闇に飲み込まれたかのようにイエスの足元にうずくまり、祈りの姿勢を取っている。これは自分を超えたものを前にしたときの人間の典型的な姿勢である。本当に「ものが見えた」とき、人は自分に見えたもの人に伝えたくなり、行動を起こす。イエスの弟子たちもイエスの復活に立ち会い、イエスの述べていることが真実であることを知ったのち、イエスの教えを全世界に伝えるという大事業を始めた。しかしレンブラントはイエスの弟子ではなく、画家である。画家の行動とは絵を描くことである。この絵には、そのようにして絵を描く彼の姿も書き込まれている。他の何も見ないで、台所で、ひたすら夕食の用意をする女性の姿で。「エマオの巡礼者」はレンブラントの自伝、あるいは自画像である。彼が普通の意味での「自画像」を一生描き続けたことはよく知られている。

この絵は単なる「宗教画」ではない。それは見ること、絵を描くことの原点への遡求である。こうした姿勢は西洋、東洋の区別なく共通している。ここから出発して、たとえばフランス印象派の画家や現代の画家たち、たとえば昨日の講演でモクシー先生が教えてくださった現代アメリカの美術家スペンサー・フィンチの作品〝sunlight in an empty room〟(2004)などを私たちは理解できるようになるだろう。

獨協大学外国語学部フランス語学科教授。東京大学大学院人文科学研究所フランス語学文学専修課程フランス文学修士課程修了。日本フランス語フランス文学会、日仏哲学会会員。日本ラカン協会理事長（二〇〇一年より現在に至る）。専門は現代フランス文学・思想。主著に『精神分析の空間―ラカンの分析理論』（弘文堂、一九八八年）、『日本の歌―憲法と署名の権力構造』（河出書房新社、一九九五年）、『他者のトポロジー』（共著、書肆心水、二〇一四年）など。